

音楽科教育の目標として、生涯にわたって進んで音楽と親しむ態度の育成が掲げられている。しかし、「音楽は好きだけど音楽の授業は嫌いだった」という意見もしばしば聞くことがある。では、現在積極的に音楽に親しんでいる人々がいるのは、本当に音楽教育の成果なのだろうか。もしそうなら、音楽の授業におけるどのような体験が、生涯にわたって音楽に親しむ態度につながるのだろうか。そこで、生涯にわたって音楽に親しむ動機のひとつと考えられる音楽の「楽しさ」に注目し、音楽の「楽しさ」とそれを生む要因は何か、また、音楽に対する積極性は、どのような音楽活動体験によって形成されるのかについて明らかにするため、本研究に取り組んだ。

研究方法は、Mihaly Csikszentmihalyi の理論を基に暴走行為の楽しさを調査した佐藤郁哉の研究手法と、宮下俊也が 6 つの因子に分類した、音楽の楽しさの規定要因の質問文を用い、音楽活動の楽しさはどの規定要因の働きが強いのか、また、それぞれの要因の楽しさ実感経験がどのくらいあったか、そして音楽活動に含まれる楽しさのイメージやその順位をたずねるアンケート調査を行った。

アンケートは、授業中に直接配布、また、知人に依頼して配布を行った。10 月後半に配布し、11 月前半で回収を行った。215 名のうち、17 歳から 67 歳までの男女、計 101 名から回答を得た。

アンケートの内容は、まず、音楽活動における楽しさの実感度と経験頻度をたずねる項目として宮下の研究で用いられた質問文 29 項目を用いた。ここでは、質問文に記述されている場面において、どのくらい楽しさを実感するか。質問文に記述されている場面を、中学校の音楽の授業においてどのくらい体験したか。質問文に記述されている場面を、学校の音楽の授業以外の場面でどのくらい体験したか。を聞いた。

次に、佐藤の研究方法を参考にし、音楽に含まれる楽しさの順位を問う質問と、音楽をしているときのイメージと他の活動との類似性を問う質問に答えさせた。

最後に、音楽活動に対する積極性を評価するために、現在の生活の中でどのくらい音楽と関わっているかをたずねた。

楽しさの規定要因についての分析において、演奏の成功体験など、達成感は音楽の楽しさを構成する最も重要な要因であると評価されているにもかかわらず、授業での経験頻度は低く、逆にその他の活動での経験頻度は高く評価された。これは、学校の授業よりもむしろ学校外の音楽体験の方が、質的に達成感を含むものであったことが伺われる。

音楽の楽しさの順位の平均の分析においては、競争や個人差など他者からの評価を意識するような関係は、統計的に有意に低く評価されており、音楽の楽しさとしてふさわしくないと考えられていることが伺われる。これは、競争や他者からの評価によって達成感を生むことはふさわしくないと捉えられていると考えられる。

音楽に含まれる楽しさの中で有意に高く評価されていたのは、「友情・仲間と一緒にいること」であった。このことは、規定要因の中でも「一体感の共有得点」が上位にあったことと一致する。儀式や祭りなど、一体感が強く求められる状況において、音楽は必須のものとなっている。これは、音楽が集団の一体感を高めるために大きな力を持っているからだ。また、音楽活動は、人と人とのコミュニケーションが頻繁に行われるものであるため、一体感の共有を感じさせ、その過程に楽しさを与える要因になっていると考えられる。

音楽のイメージと他の活動との類似性において、有意に高い得点を示した要素に共通していることは、激しいビートに身をゆだねるような一時的で感覚的な喜びというよりも、考えを深めたり、自分の糧になったりするようなものである。逆に、低い得点を示した項目は、スリルを伴った短期的な一瞬の喜びを生むような内容のものである。つまり、音楽は一瞬の感覚的喜びを得るようなものというよりも、長期的に残る喜びを得るもの、深い感動を与え、自分を豊かにするものであると捉えられていると考えられる。

規定要因の「鑑賞による感動」と「音楽の理解」については、年齢によって有意に差があり、20代以下より、30代以上の方が高い得点を示した。年長者ほど楽しさを引き出していたことについては、年齢を重ねるごとに経験も増えるため、音楽活動に対しても、経験と重ね合わせることができてくるからだと考えられる。また、深い感動を伴うような音楽理解や鑑賞体験は、学校の音楽教育の場以外、習い事をしていないかぎり一般的に困難で

ある。よって、音楽の楽しさを引き出すためには、学校の音楽科教育の中で音楽理解や鑑賞の経験を積むことがやはり重要だ。

そして、楽しさの規定要因を高く評価した人ほど、学校の音楽教育を離れた後も、趣味で楽器の演奏をするという関係が見いだされた。このことから、学校やその他の活動において、より楽しさを体験した人ほど音楽に対して積極的だということが考えられる。よって、生涯にわたって楽しく音楽活動を行っていくために、これまで述べたような楽しさを含む活動を、教育の現場で取り入れていくことが望まれる。

今回のアンケート調査を基に、学校において、次の3つの「楽しさ」体験を与えることを提案する。

1つ目は、音楽の楽しさを構成する最も重要な要因は達成感である。しかし、その達成感を与えるために競争や評価を用いることは適切ではない。達成感を体験させるためには、教師は、様々なわからないものやできないものへの挑戦の機会を与えることが必要だ。また、達成感は、自発的に活動を行うことでより実感できる。よって指導者は、生徒が自分のレベルにあった曲からどんどん高いレベルの曲を目指して練習できるというものにするという方法をとるなど、生徒の挑戦水準に見合った内容を、生徒が自発的に活動できるよう工夫をする必要がある。評価の際は、全体から個人のレベルを判断する相対評価ではなく、個人がどの程度成長したかをみる絶対評価を用いるとよい。

2つ目は、仲間と共にコミュニケーションを図りながら、音楽を共有し一体感を得られる活動が望まれる。例えば文化祭や卒業式などの行事の場において生徒の演奏を取り入れることがある。行事の音楽は一体感や1.で述べた達成感を生むためにも特に重要な役割を果たすと考えられるため積極的に取り入れることが望まれる。また、アンサンブルや合唱において、生徒が協力して音楽表現を作り上げていく活動を積極的に取り入れるなど、コミュニケーションの場を意識的に生かすことで、より楽しい音楽科授業を展開できると考える。その際に、教師が主導となる場合であっても、生徒との対話を積極的に行い、全体で音楽を作るという意識を持つことが大切だ。

3つ目は、新しいことを発見したり作ったりする等、一時的な喜びよりというよりも、長期にわたって喜びが持続する体験や、深い感動を味わえる体験を取り入れることが大切である。楽しい音楽の授業を目指すとき、一般にゲームを取り入れたり、流行歌を教材として取り上げるなど、短期的な刺激を与えようとしがちだが、それだけではなく、音楽のしくみについてじっくり学んだり、質の高い作品に耳を傾けるなどの活動を、積極的に行っていくべきだ。新しいものを知ったり理解したり、音楽の一体感を感じたりすることは、深い感動を生む。特に、鑑賞による感動や音楽の理解といった内容は、学校の音楽科教育以外では体験しにくい楽しさである。このため、音楽科授業の場で積極的に扱い、発見や感動の体験をより多く経験させることが大切だ。